

今年も関西インカレの時期がやってきた。もう1年経ったのかというのは年寄りの繰り言だろうか？ ついあれもこれも書きたくなり、結果として昨年より長くなってしまった。ご容赦いただきたい。

結果としては、男子は60点6位、女子は16点13位に終わった。特に男子は1部昇格を目指していたが、主力選手に故障者が多く出たこともあり、昨年と同様の結果に終わったのは残念であった。

現役の手による写真と出場選手のコメントによる報告がされるので、こちらは観戦して気が付いたことを記していくことにする。現役報告と照らして読んでいただければわかりやすいのではと思う。

ではトラック&フィールドに先立って行われたハーフマラソンからご報告していくこととしたい。

なおこの観戦記は主として神戸大学の応援記ではあるが、1部も含めた他校の動向も交えて紹介していく。

4月20日(木)1日目 ハーフマラソン3人が入賞!

ハーフマラソンは快晴の下長居競技場周回コースを利用して実施された。昨年は丸岡君が2位に入って勢いをつけたのが記憶に新しい。今年は1部から龍谷大、びわすポ大が降りてきた。

龍谷長距離陣(だけではないが)は昨年の天理、阪大の比ではない。強力な大経もあり苦戦が予想される。神大の布陣は、坂元(4年)、桂(3年)、平井(2年)。昨年2位の丸岡(M1)は調子が上がりず出場を断念。坂元は昨年の駅伝の快走でロード適性を証明した。長いほどいいらしい。桂はトラックでは今一番調子がいいとのこと。平井は2年生だが昨年の端正な安定した走りが記憶に残る。

コースは第2競技場を2週半して周回コース(3km弱)へ出て7周し競技場へ帰りゴールする。

レースは1部のトップランナーが第1集団を形成して進むが、この中に2部の龍谷1人、大経の2人が入っている。2部の4位以下はかなり遅れての第2集団を形成、人数は15名程度だろうか。わが神大勢もきちんとその中に入っている。坂元が先頭付近で桂と平井はグループ後方につけている。坂元は昨年あたりから常に前で勝負するレースパターンに変わってから記録も大きく伸びた。本日もその通り前にいる。調子が良いのは顔つきでわかる。応援は椎木会長、平田副会長、絹田の3人、逆回りで応援しながら周回コースを1周する作戦だ。

3周目、まだ集団は崩れず3人の位置関係も同じ。3人とも余裕がある。4周目になると桂が少し苦しくなり徐々に遅れだした。5周目、坂元が完全に集団を引っ張っている。ペースはそれほど早くないが集団は10名程度に絞られてきた。この中には甲南の14分台ランナー藤本もいる。桂は完全に脱落、平井はまだきち

んと走っている。6周目先頭は坂元と藤本の2人。ここで2部の4位だ。龍谷の2人と大経の1人は後方。よしよし、である。平井はその数十メートル後方の6~8位の3人の中で粘っている。桂は12番目くらいだが走りが落ち着いてきた。7周目、第2集団は完全に坂元と藤本のマッチレースになった。坂元は最後のスパートに不安があるのでこの1周で離さないと勝機はない。平井も追走。桂も元気が戻って少し順位があがり10位。ゴール前に陣取っていたら坂元が甲南から10m遅れて帰ってきたが差は縮まらない。5位だがよく走った。とっと思っていたら平井が続いた。6位。あっぱれ。程なく桂が8位まで盛り返して帰ってきた。坂元5位、1時間9分01秒、平井6位、1時間9分28秒、桂8位、1時間9分58秒。合計8点獲得、全員が9分台。坂元に至ってはあと2秒で8分台。いずれも自己新の好記録。大健闘のハーフだった。ちなみに昨年の丸岡は1時間8分33秒、坂元は1時間11分11秒だった。この1年の坂元の進化が見て取れる。2部は1位龍谷、2、3位が大経、4位甲南の順だったが、強豪校の龍谷の2人、大経の1人を食った大健闘のレースであった。坂元は完全に持ち味を出した会心のレースであったろうし、平井も自分をよく知り省エネに徹したクレーバーなレース運びだった。桂は早くに脱落したがその後の粘りは称賛できる。

椎木会長が講評で秋の駅伝が楽しみになってきた、と少し気の早い挨拶をされたが正にその通り。

神大長距離陣の充実ぶりを感じたレースだった。達成感あふれる3人の顔が印象的だった。

5月10日(水)2日目(トラック&フィールド1日目)

ハーフから20日経った。このハーフを切り離すというのは考えてみればいいシステムで、20日あればかなり回復しトラックレースのスピードも戻ろうというものだ。

さてレースである。今回も投擲のある第2競技場に足を運べなかった。投擲の選手他達ゴメンナサイ。

今年は10日の水曜日からは始まって土曜日に終わるという変則日程。このため土日しか来れない現役OBには辛い日程となった。

競技は十種競技の100mから始まる。本日は大半が予選競技だが、多くの部員たちにとって、先ず関西インカレに出ることが大きな目標。次には予選突破だ。今回は4年生になって初めて出場できた選手も何名かいた。そういうところにも目を向けていきたい。

十種競技 宮崎、吉田始動

昨年2位の4年宮崎(6588、ランク2位)、今年に入って念願の6000点を超えたM2吉田(5887、8位)、元々投擲だがスピードがあるので昨秋から十種に挑戦してきた4年上野(5368、9位)の3名がエントリ

ーしたが、上野は故障で投擲に専念することになり残念ながら棄権。事前の記録からすると、びわスポの黒田が6900点台で断トツ、次いで6500点台の宮崎、その他は6000点あたりにひしめいている。吉田が3位に入れるか、という競技に見えたが、実はそうではなく宮崎の不調で2位以下が大混戦となる。内容は後述。

女子1500m予選 甲斐予選落ち

甲斐（2年、持ちタイム4'57"77、46位）が出場。関西の中長距離は全国的にレベルが高いので予選通過も4分30秒台。結果4分55秒21の自己新だったが予選落ち。まだ2年、今後は9月の女子駅伝を目指しては練習することになるが、本年中にまず4分40秒台で走れるようになってほしい。

男子1500m予選

柴田予選落ち 丸岡棄権 藤田エントリーできず

柴田（2年、4'13"33、37位）が出場。もう一人丸岡（M1、3'59"86、8位）は調子が上がらないこともあり、5000mに専念するため棄権。昨年4位の藤田（4年、3'56"51、4位相当）は故障明けでエントリーもできず。残念。

柴田は入部前の1年生時に大阪選手権の800mで1分56秒台で走っている逸材。12月に入部したが、今回は800mにタレントが多かったので1500mに回った。3週目で遅れて予選落ちだったが、4分13秒33の自己新。2週目までは中段のいいポジションをキープするなどレースセンスを感じさせる印象だった。まだ1500mを走り切る走力はないが、今後1500mも走れる800mランナーに育ててもらえるとありがたい。スピードを持っているのが魅力の有望株だ。見守っていききたい。

男子400m 八木予選落ち 植田棄権

昨年4位でランキングも4位（48秒19）のM1植田は800m、マイルリレーに専念するため棄権。

八木（4年、51秒01、21位）は初出場。八木は1600mリレーの1走も務める。リレーで自信を持って飛び出せるように何とか自己新を出してほしい。結果は予選落ちなるも50秒77の自己新。明日の1600mリレー予選へ向けて手ごたえをつかんだことだろう。

男子100m予選

近藤（3年、10"96、25位）、水野（3年、10"97、33位）、森山（4年、11"26、50位）の3人が出場。近藤、水野は昨秋相次いで10秒台に突入。短距離復活の狼煙を上げたのは記憶に新しい。森山は4年になって初めての関西インカレ出場。彼は400mリレーメンバーだが、近藤が授業の関係で決勝は走れないので、予選を通れば森山が決勝を走ることになる。そのためにも予選をしっかりと走り自信をつけておきたいところだ。レースは水野が先ず余裕をもって着順で通過。体のキレがいい。10秒97の自己タイ。近藤は力みがあつて11秒03の不本意なタイムだがプラスで拾われて準決へ。森山は予選落ちしたが11秒21の自己新。3年間の地道な努力が実を結んだ。

女子100mH 森下準決へ 宮崎予選落ち

宮崎（4年、14"13（学内記録）、17位）、森下（4年、14"43、21位）が出場。宮崎は2年生時に学内記録を更新したがその後故障等で伸び悩んでいる。森下は常に2番手であったが着実に力をつけてきている。果たして宮崎は14秒44で惜しくも予選落ち。一方森下は見事14秒25の自己新で準決へ進んだ。

男子110mH 藤原、山口準決へ

藤原（4年、14"93、11位）、山口（2年、15"30、20位）が出場。宮崎（15"15）は十種専念で棄権。藤原は昨年度待望の14秒台に突入。一流ハードラーの仲間入りを果たした。400mHにも出場しており期するものがありそうな面構えをしている。

レースは藤原が14秒92の自己新で準決へ。持ちタイムは11番目なので決勝進出はギリギリのところではあるが自己新を出せばチャンスはある。頑張ってもらいたい。山口は精一杯食い下がり15秒24の大学ベストを出しタイムで拾われ準決へ。よくやった。

女子400mリレー 好記録なるも予選落ち

武村（2年、三段跳）、森下（4年、100mH）、日高（2年、走高跳）、宮崎（4年、100mH）の4人が出場。各競技の混成チームでもあるが実は結構面白い布陣。各種目の強化にもつながるがこの4人で走れるのもあと少し。頑張ってもらいたい。結果は49秒39の好記録（昨年は49秒47）なるも予選落ち。レース前の各走者が残り3人に大きな声で呼びかけている（各校もやっているが）シーンが微笑ましく印象的だった。「神戸大学の歴史が又1ページ」

男子400mリレー予選 好記録で決勝へ

喜多（1年、10"95）、高柳（2年、200m23"00）、近藤、水野の布陣。喜多はこの4月に入部後いきなり10秒台をマークした逸材。これで神大も10秒台ランナーを3人要することとなり、期待が大きく膨らんだ。2走の高柳は200m23秒00ではイマイチのように見えるが、高校時代に400m49秒台で走っておりこんなものではない。近藤が決勝を走れないので決勝は3走を森山が走る。そのため本来2走の近藤が3走に回った。高柳が2走で各校のエースとどれだけ渡り合えるかがこのレースのポイントだ。

号砲一発、喜多がいいスタートを切り2走の高柳にスムーズにバトンが渡った。おお！高柳が各校と互角に競り合っているではないか。3走は近藤。さすがに3走では強い。トップで水野へ渡り水野が更に差を広げて組トップ、41秒57の好記録で見事決勝に進んだ。この2年間の低迷を知っているだけに、沸き返る現役諸君と一緒にいたが思わず目頭が熱くなった。走り終えた近藤が満面の笑みで水濠の前のスタンドに手を振った姿が心に残る。やりました！決勝は頼みます、と言っているようだった。41秒57は昨年の予選タイム42秒53を1秒近く上回る。決勝は近藤から森山に代わるのである程度タイムが落ちるのは避けられないが頑張ってもらいたい。

※なお2部に続いて行われた1部400mリレー予選では、まず1組で関学が多田修平君(織田記念10"16)を温存しながら39秒66の関西大学新を出した。会場がどよめく中、2組で大体大が39秒62のさらなる関西学生新。決勝は関学が多田君を起用するだろうから、39秒1~2の大幅な関西学生新も期待される。多田君は東洋大の桐生君に挑む学生NO.2の呼び声も高い選手。決勝が非常に楽しみだ。

女子400mリレーでは100m予選で11秒55、200m予選で23秒66の関西学生新を出した中村水月さん(4走)と400mの日本チャンピオン青山聖佳さん(3走)を擁する大阪成蹊大が3走と4走でのバトンミスで予選落。関西学生新も狙える布陣だったが残念。決勝は甲南大が優勝候補に浮上した。

十種競技 1日目は宮崎2位、吉田3位なるも混戦

1日目の5種目を終わって、びわスポの黒田が独走気配。2位以下は3000~3100点前後で混戦。

宮崎は2番手だが昨年より300点ほど落ちている。やはり春先の故障が影響しているのであろう。吉田は宮崎よりわずかに遅れの3位。このまま粘れば表彰台だし宮崎に初めて勝てるかもしれない。

2日目は棒高跳びが今後の順位を決めるキーと見た。

5月11日(木) 3日目(トラック&フィールド2日目)

この日は朝から曇っており少し肌寒いくらいだ。この日から決勝種目が出てきて関西インカレもいよいよ熱を帯びだす。

男子110mH準決勝 藤原、山口 決勝へ進めず

予選で自己記録を更新した藤原と山口が出場したが、残念ながら記録が伸びず(藤原15秒01、山口15秒26)予選落ちとなった。特に藤原はこの種目に賭けてきただけにさぞや悔しかったことだろう。

400mHでリベンジしてほしい。山口は初めての関カレで2本走った。いい経験になったはずだ。

男子三段跳決勝 永田自己新(15m20)で2位 神田8位

永田(M1、15m07、2位)、瀧瀬(4年、14m81、10位)、神田(2年、14m72、11位)。永田は昨年兵庫インカレの400mリレーで故障、シーズン前半を棒に振った。やる気を取り戻すのに少し時間がかかったようだが秋から復調。15m台に突入、ランクは4位。ランクトップはびわスポ大の岡林で15m86。ここは厳しいが十分表彰台を狙える。瀧瀬は春先に故障し出場が危ぶまれたが何とか出場。しかしまともに跳べるか疑問。跳躍が始まって永田が15m台を連発。体が切れている。瀧瀬は故障の影響か思い切って踏み切れず14m27で予選を通らず。彼の悔しい気持ちが痛いほど伝わってきた。神田は2年生で今年初めての出場。自己記録には及ばない14m53だったが、かろうじて8番手で予選を通り三段跳の後継者に名乗りを上げた。

一方、びわスポの岡林はファウルが多く記録が伸びない。最終跳躍前で永田の15m20(自己新)がトップ。

優勝の可能性が大きくなった。岡林も含め15m20までが数名の混戦。しかし6跳目で岡林が意地の15m37の跳躍。第一人者の底力を見せた。いよいよ最終跳躍者の永田の番だ。永田は感触は良かったそうだが最終跳躍はわずかにファウル。優勝を逃した。神田は最終順位も8位だったが見事1点を獲得した。この日、永田を見ていたが、ステップで踏切った後、反対足が胸まで引き付けられ非常に躍動感のある(カンガルーを思わせる)フォームであり、下位の選手とは明らかに異なるフォームで跳んでいるように見えた。最後の跳躍でファウルし地面を叩いて悔しがっていた。競技はまだ続けるらしい。伸びしろは十分あると本人も感じているであろう。ぜひ15m50の大台突破⇒学内記録更新に挑戦してほしい。

男子砲丸投げ 吉田、上野が7、8位

吉田(M2、11m59)、上野(4年、12m01)、太田(3年、11m90)のおなじみトリオが出場。

上野、太田が持ち記録で7位、8位。吉田が10位と3人入賞も不思議ではない。上野の故障状態が気になるが、吉田は調子は良さそうだが十種と並行しての投擲が気にかかる。結果は吉田が11m77で見事7位入賞。やはり調子が良さそう。上野、太田は実力を発揮できず、上野は11m41で8位に入ったが太田は10m22の低調な記録に終わった。

女子100mH準決勝 森下決勝へ進めず

森下が出場するも14秒39で予選より記録を落とし落選。追風0.5mの好条件だっただけに残念だった。

男子100m準決勝 水野・近藤 決勝へ進めず

近藤、水野が出場するも、それぞれ10秒97、10秒95(自己新)の好記録なるも惜しくも準決落ち。それでも来年度の決勝進出に向けて確実な足がかりができた。水野は400mリレーで激走してほしい。

※本日は1部100mの決勝に注目の多田修平君(関学)が出場した。結果は10秒22だが2位の石田真也君(京大)の10秒61を0秒39も離して圧勝。明日の400mリレーへの期待が高まった。

女子走高跳決勝 日高1m72で5位!

日高(2年、1m72、9位)が出場。日高は高校時代から有名な選手だが、期待に背かず1年時から活躍。特筆すべきは好不調の波が非常に少ないこと。彼女が低い記録で敗退したのを見たことがない。

さてこの種目は秦(武庫川女大)の1m81が飛び抜けていて、ランク2位は1m75なので日高にも上位入賞のチャンスがある。日高は1m72を3本目で跳ぶというガッツを見せ見事5位に入賞した。あっぱれ!

女子1600mリレー予選 予選落ち

西田も米田も卒業し、メンバー選定にも苦労する中、武村(跳躍)、明瀬(800m)、森下(100mH)、宮崎(100mH)が予選に挑んだ。結果は4分01秒40で予選落ち。ラップは武村61秒70、明瀬58秒24、森下60秒73、宮崎60秒71で明瀬のラップはなかなか。

800mの期待が高まる。ちなみに1昨年が3分51秒36。昨年が3分58秒78。400m、800mランナーが減っているのがつらいところだ。

男子1600mリレー予選 3分14秒06(歴代5位)で決勝へ

八木(4年、50秒77)、高柳(2年、49秒74)、小山(4年、50秒34)、植田(4年、48秒19)が出場。八木はめどがついた。高柳も1本走った。このレース、3走の小山の出来次第と見た。明日は走らない近藤を使う手もあると思ったが、安定していて八木よりタイムもいい小山の評価が高く迷いはないようだ。神大は1組目。2時間半前の400m決勝で46秒台で連覇した三原を擁する甲南大と、47秒03で3位の池田を擁する大阪国際大のいずれかを破らないと着順では決勝へは行けない。レースは八木が頑張りほぼ中段、2走の高柳が勢い良く飛び出しバックで先頭グループに並ぶ。勢いそのままに第4コーナーを回りなんとトップに躍り出た。鮮烈な走りだった。3走の小山も初出走だったが無難に走り、最後で甲南にかわされたが、2位でアンカーの植田にバトンが渡った。3位は予想通り大阪国際大。1. 2. 3位の間隔はそれぞれ2mない。そのままバックから第3コーナーを回り僅差のまま最後の直線に。ここで甲南の三原が地力を発揮、そのまま逃げ切ったが、2位争いは大接戦になり植田も格上相手に粘ったが、最後の20mで力尽き大阪国際大にかわされた。しかしタイムは3分14秒06という歴代5位の思ってもいない好記録。各自のラップがまたすごく、八木が49秒86、高柳が48秒09、小山が49秒27。植田に至ってはなんと46秒74。失礼かも知れないが各自実力より1秒早く走った感覚ではないか？着順では通らなかったが、タイムではトップで堂々の決勝進出が決まった。神大はベストメンバーだが強豪校では温存しているメンバーがいるかもしれない。しかし決勝でこの記録なら決して後れを取るようなタイムではない。

練習不足を心配していた植田が快走し800m連覇が現実味を帯びてきた。

※このレースの様子は400mリレーと合わせ、動画を見てほしい。YAHOOで「関西インカレ2017 2部」で検索すると、「2部結果・速報(リザルト)」というブログが出てくる。その中には記録すべてと動画をかなりの種目で観ることができる。両種目とも見れるので是非ご覧いただきたい。感動間違いなし。

男子5000m決勝 丸岡が粘り8位に

5000mはタイムレースである。昨年優勝の丸岡(M1、14'49"84、7位)と桂(3年、15'15"98、20位)が2組目に出場。龍谷大の参入の影響がここに出ているが、上位は14分20秒台が2人、30秒台が3人というハイレベルで昨年度より一段上。レースは龍谷、大経を中心にトップグループは10人。丸岡は中段、桂は後方から追走。桂は事後情報だが、ハーフの後少し無理をしたらしく直前に故障したとのこと。1000mを過

ぎズルズルと後退。一方丸岡は徐々に順位を上げ、前から落ちてくる選手を拾い始めた。昨年ほど自信がないのでトップグループにはつけないのでポチポチ行こうか(それでも結構速いが)というところ。3000mを過ぎ10位に上がり漸く8位のしっぽが見えてきた。最後の1000mとなり更にペースを上げる。8位に上がった。ラスト1周、スパートしたが7位までは残念ながら届かなかった。タイムは15分05秒。この気温なら好記録の部類。良く粘った。桂は後半粘るも自己記録より30秒遅い15分45秒。残念な結果となった。

十種競技 宮崎が2位、吉田は3位

最終結果は宮崎が2位(6175点)、吉田が3位(6103点)と、予想通り?2,3位を占めた。

吉田はほぼ実力を出し切ったと言えるが、宮崎は昨年より400点記録を落とし、かろうじて吉田の追撃をかわした。最後の1500mは宮崎が4分58秒46(569点)、吉田が4分59秒37(563点)と僅差。2人の意地の張り合いに見えたレースは結構面白かった。勝負のポイントは予想通り棒高跳にあったようだ。吉田は4m20の自己タイ、宮崎は4m10の自己新。ここで崩れる選手もいたが2人は十分に点を稼いで3位以上を確定させた。宮崎は当然といえば当然の2位だが吉田の3位は特筆に値する。椎木会長も最終日の挨拶で特に吉田君のことを取り上げておられたが、大学院になってからも変わらぬ熱意を陸上に傾け、念願の6000点をクリアーしての関西インカレ3位は見事だ。天晴れと言いたい。普段はひょうひょうとした印象の吉田だが、最後にガツンと存在感を見せつけた十種競技だった。彼の敬愛する小田垣先輩の棒高跳の学内記録4m50に残り半年で挑戦できるものならしてほしいと思う。来年はこの2人の十種が見れないとは寂しい限りだ。

5月12日(金)4日目(トラック&フィールド3日目)

大会も本日を入れて後2日。いよいよ佳境に入ってきた。1部昇格はすでに絶望であるが、残り種目でキラリと光る神戸大学をぜひ見せてもらいたいものだ。

女子200m予選 森下予選落ち

森下(4年、26'62)はランク44位なので予選通過はほぼ絶望だが、森下が短距離の伝統を受け継いだ中で200mに出るのは意味がある。伝統の継承だ。26秒94と自己記録を更新できなかったがリレーも含め5本目。疲れも相当出てきているのであろう。これで森下の関西インカレは終わった。お疲れ様。

女子円盤投げ決勝 麓 決勝に進めず

麓(4年、36m35、13位)が出場。ランク8位とは1mもない。一発引かかると入賞ラインだ。どこまで練習がつめているのだろうか?結果は35m98の12位でほぼ事前ランキング通りの結果に終わった。8位の記録が38m台と事前ランキングより2mも跳ね上がってしまったのでは仕方がない。砲丸で頑張ろう。

女子三段跳決勝 武村 まさかの予選落ち

武村(2年、12m41、6位)が出場。武村は1年時から走高跳の曰高と並ぶ逸材。昨年早速三段跳の学内記録を更新した。しかし助走からキレを欠き11m79の武村にしては信じられない記録に終わり決勝に進めなかった。ひとつ気になったのは、前日に1600mリレーを走っておりその影響である。バネとキレで勝負する跳躍競技で、400mリレーならいざ知らず1600mリレーを走るの(しかも前日)リスクがあるのではないかと明らかに最後の3歩でキレを欠いていた。よくよく考えた結果なのでこれ以上は言えないが、1位が12m61、8位が12m17なので武村にも大きなチャンスがあっただけに残念な結果だった。今日はゆっくり休んで明日の走幅跳に全力で臨んでほしい。

男子200m予選 水野通過 高柳自己新も予選落

水野(3年、22"06、26位)、高柳(2年、23"00、51位)が出場。100mを見ていると水野は楽に21秒台で走れるはず。また高柳も400mリレーと1600mリレーの快走を見ると、少なくとも22秒の前半では走れるような気がしていた。水野は最後は流しながらの22秒10で通過。準決以降に期待が持てる。高柳は最後走りが固くなったがそれでも22秒44の自己新(予選落)。しかし今の状態なら本年中に水野、近藤、高柳が21秒台の揃い踏みをしそうな気がする。椎木会長とも話していたが、200mランナーの育成が対校戦でいい戦いをする秘訣。もっと出でよ200mランナー。

男子400mH予選 藤原が好記録で決勝へ

清水(4年、53"83、7位)、藤原(4年、54"61、10位)、佐々木(4年、55"03、15位)の4年生トリオが出場。佐々木は初出場のはず。昨年は清水が記録を53秒台に伸ばし今年を期待させた。藤原は110mHから距離を伸ばしてきたが、期待していた110mHで決勝に進めずこの種目に期するものがあつた。佐々木は気後れせず戦えるかどうか?準決がなく3組2着プラス2で決勝となる。

1組目の清水は54秒72と自己記録を1秒も下回って組4位で予選落ち。どうしたのだろうか?期待していただけに気になる。2組目の佐々木は54"76の自己新なるも4位で予選落ち。しかし3組目の藤原は110mハードルの選手らしくスムーズなハードリング、スピードも最後まで落ちず53秒45の大幅な自己新(歴代7位、予選通過6位)。プラスで拾われ決勝進出を決めた。予選通過者は全員53秒台。我々のころ(1973)の2部の優勝タイムは56秒7(新22東向さん)。タータンになり、学校数が増えたとはいえ厳しくなったものだ。(優勝は龍谷大の道下で51秒78)

女子800m予選 明瀬 余裕で通過

明瀬(4年、2'14"25 ランク11位)、宮崎(2'24"80)が出場。女子800mはこのところ神大のお家芸になってきていたが、昨年学内記録を作った米田が卒業し入賞期待は明瀬一人となった。

明瀬はスタートからレースを支配し余裕をもって1位

で通過(2分15秒80)した。

宮崎は標準タイムぎりぎり参加したが、気後れしたのか自己記録に遠く及ばず2分33秒54だった。

男子800m予選 植田、川植、南部が予選通過

植田(M1、1'51"93、昨年優勝)、川植(4年、1'56"01)、南部(2年、1'56"41)の3人が出場。歴代でも最高の800mの布陣ではないか?南部はまだ2年、どんな選手だろう?と注目して見ていた。

植田は2周目で先頭に立ちそのまま1位で通過。余裕の1分54秒87。川植も昨年から800mランナーっぽくなってきたが、この予選も積極的な走りでも2位。最後は横を向いて順位を確かめる余裕(1分57秒33)。力をつけてきたのがよくわかる。南部は1周目は2位で通過。バックで集団に飲み込まれて一時は6位まで落ちたが最後に粘って一人かわし自己記録に迫る1分56秒81の好記録。タイムで拾われ見事予選通過。まだ2年、1500mに出た柴田とともに植田がいる間に大きく伸びてほしいものだ。

男子円盤投 上野 3位で表彰台へ

上野(4年、39m20、7位)、吉田(M2、33m64、17位)が出場。十種を棄権して投擲にかけた上野が最後を飾るかどうかが注目。直前のGWに41m08を投げ自信を持って出場。結果、40m23の好記録で3位、表彰台に上がった。吉田も入賞はならなかったが34m52の自己新。十種での好調を物語る投擲だった。上野は投擲選手の中でもスピードがあり、昨年は400mリレーのメンバーにも名を連ねていた。きっとそのスピードを上手く回転に変えることができたのだろう。おめでとう。やはり4年生が活躍するとホッとする。

男子200m準決勝 水野棄権

水野が予選を通過していたが、リレーを考えて棄権。確かに入賞となると厳しいかもしれないが21秒台を出す好機でもあったので少し残念だった。あまり本数をこなせないタイプらしいが今や短距離の大黒柱。来年を見据えてどこかで本数に挑戦してほしい。また違う自分を発見できるかもしれない。

男子棒高跳決勝 吉田、宮崎 決勝に進めず

吉田(4m20、10位)、宮崎(4m00、13位)が登場。宮崎は十種で4m10の自己記録を出している。吉田は小田垣先輩の学内記録4m50が頭にある。今回は体が切れているので少しでも近づくチャンスだったが、自己タイの4m20に終わった。しかし十種からの流れで疲労も蓄積していたのだろうがよく頑張った。宮崎は春先の練習不足が影響してガス欠の状態だったかもしれない。自己記録に遠く及ばない3m60に終わった。この種目はトップが4m70、ランキング8位でも4m40というレベル。昨年より一段とレベルが上がった。この種目は吉田、宮崎という神大にすればなかなか強力なコンビだったがそれでもこの結果。さらに来年は2人が卒業し大きな穴があくことになる。技術を向上させるには非常に時間がかかる競技なので、やはり高校で4m前後を飛んでいる選手をスカウ

ティングするしか選手養成の方法はないであろう。

男子走幅跳決勝 永田惜しくも4位 大塚は8位

永田 (M1、7m44、ランク2位)、大塚 (4年、6m68、18位) の2人が出場。瀧瀬 (4年、7m02、9位) も7mジャンパーとなり十分入賞を狙えるところだったが三段跳で足を痛め無念のリタイヤ。

ランク1位は三段と同じびわすポ大の岡林で7m80と流石に強い、ランク2位の永田は何とか表彰台には上がってほしい。大塚は昨年も出たが予選落ち。入部以来ずっと7mを跳びたいと念じて来たらしい。今回7mを跳んで入賞できれば最高だが……。三段と違い永田がリードできる展開にはならない。7m前半のところに数名がひしめく混戦。結局永田は7m18で惜しくも4位。優勝が7m46、3位が7m34なので今回の調子なら十分優勝も狙えた。残念！なかなか思うようにはいかないものだ。しかし関西インカレではずっと悔しい思いをしてきたが三段跳2位、走幅跳4位は見事だと思う。大塚は6m95の自己新で8位に食い込んだ。7mまでアト5cmだったが関カレ入賞という目標は達成。残り時間は少ないが7mに挑戦してみてもいいと思う。

男子3000m障害決勝

坂元 大幅自己新なるも入賞ならず 藤田棄権

昨年は藤田が9分13秒の好記録で阪大を振り切って優勝したのは記憶に新しい。彼は秋に5000mでも14分49秒で走り、駅伝でも1区で6位と快走した。多分今年の関西インカレでは5000m出場も視野に入れていたのではないかと推測される。冬季トレーニングで距離を踏もうとロードを走りこんだのが完全に裏目に出て故障。結局4年の関カレを棒に振ってしまった。私も藤田は8分59秒の学内記録に迫ってほしかったのでとても残念だった。この冬場にロードを走る、というのはどうなのだろうか？ 部としても武庫川の堤など芝生の不整地などで距離を踏むことをもっと考えてもいいように思う。

期待はハーフで5位入賞したロードの鬼、坂元 (4年、9'38"38)だ。彼は昨年以前でレースをするようになって強くなった、と前述したが、昨夏の酷暑のレース (近国体だったと思うが) で出した記録が持ちタイム。駅伝とハーフの様子を見ても、9分30秒は楽に切ってくる、そうなれば1組でも2組の8位あたりを食うことも可能となる。しかしレベル的には昨年より出場選手層が格段に上がっている。持ちタイム9分35秒以上の1組の坂元は序盤抑えていたが、中盤から前へ上がっていく。2000mでは先頭集団に入り、残り2周で先頭に出た。最後のスパーク力があまり強くないのでロングスパークで離れていこう、という作戦だが実際に実行するのは勇気がいる。しかし坂元はやってのけた。残り1周のカネがなったとき、2位はトップ坂元から20m後方、3、4位が更に10m。独走状態だ。バック中央でも依然として20m差をキープ。逃げ切れる、と思ったが残り200mから後続もスパーク。差が縮まり始

めた。水濠を超えて直ぐにかわされ2位。最後のハードルを越えて一人抜かれ3位、ゴール直前にもう一人に抜かれ4位に転落した。タイムは9分29秒23の大幅自己新だが2800mまでは坂元がレースを支配していただけに本当に惜しいレースだった。上位3人は特にラストが強かった印象。坂元のスパーク力がもう少しあればと悔やまれるがそれが彼のスタイル。心置きなく戦った清々しさだけが残る感動のレースだった。

女子800m準決勝 明瀬 余裕で決勝へ

予選で好走を見せた明瀬の走りに注目。ランキングでは11位だが予選の走りは悪くても上位入賞、あわよくば表彰台、と思わせる内容だった。明瀬の持ちタイム2分14秒23に対し、トップは2分11秒台。3秒の間に10人がひしめく。マイルでのラップが58秒台と明瀬は昨年より一段とスピードもついてきている。明瀬は積極的にレースを進め、2分14秒49と自己記録に近い記録で組3位だがトップとほとんど差がなく通過した。もう1組はトップが2分16秒台。明日の決勝ではどのような走りを見せてくれるだろうか？

4年間の集大成の走りを見たいものだ。

男子800m準決勝 植田、川植決勝へ

直前の明瀬のレースは男子3名にも勇気を与えたはず。陸上競技は個人競技と言われるが、今回の出場選手が皆言っているのは応援等ですごく力をもらったこと。また3000m障害の坂元のような積極果敢なレースも仲間にも勇気を与える。果たして3人はどうか？ 3組2着プラス2。1組目の川植は途中で先頭に立つなど積極的に走り、2位ではあるが3位を離して余裕をもってクリア。自己記録に近い1分56秒17。この調子なら決勝での1分54秒台が狙える。2組目の南部は流石に緊張したか1分58秒97で組7位だった。2周目に入るときのポジション取り等まだまだ勉強するところがありそうだ。3組目の植田は、優勝候補の一人、市大の矢守と顔を見合わせながら並んでゴール。1分52秒99。余裕をもってこのタイム。1周目のタイム如何だが、1分50秒台も夢ではない。決勝はこの二人になりそうな気がしてきた。最後にどれだけ足を残しているかの勝負だ。ゴールに入ってから植田と矢守君が談笑していた。お互いライバルと認め合っている証拠だ。こういうのはいい。

男子400mルー決勝 予選よりタイムを上げるも8位

41秒57の予選記録は全体で6位、しかし予選でエースを温存している大学もあるのでどうか？ 予選で述べたが、近藤が工学部の授業で出場できないため3走が森山に代わった。二人の100mのタイム差は0秒2はあるのでそれだけタイムが落ちると考えるわけだが結果はどうか？ 結果はトップの龍谷大の40秒42を筆頭に3位までが40秒台。流石に速い。4位の市大は41秒05の好タイムだった。神大はメンバー変更のハンデをはねのけ41秒53と予選記録を更新したが甲南と0秒01差の最下位。このチームでは最高の結果だろう。しかしここ2年と比較

すると信じられないタイム。3走の森山君、良く頑張った。予選の布陣は3年2人、2年1人、1年1人と若い。来年は40秒台で表彰台へ上がってほしい。

※前述したが、男女の400mリレーで関西学生新が誕生した。まず女子、大阪成蹊大がない中、甲南大が44秒98で関西学生記録を0秒01更新。1部では、関学の多田修平君が2走で登場し圧倒的な走りを見せ、関学が39秒11の驚異的な関西学生新で優勝。2位の近大も39秒49の関西学生新だった。多田君はその後5月22日のセイコングランプリ陸上の100mで向い風の中10秒35でケンブリッジに0秒04遅れの3位(優勝はガトリン)。ガトリンに注目されたことで一躍全国区になった。6月の日本選手権では、桐生、山縣、ケンブリッジが注目の的だが、多田君がそこへ割って入るかも知れない。華奢な体だがそこから驚異的な足の回転がどうして生まれるのか？ミステリーだ。今年の日本選手権は長居で6月23日~25日に開催される。注目の100m決勝は24日。当然観戦に行く(会長も行くらしい)。9秒台突入か？も含めこれほど注目を集めるレースは滅多にない。

5月13日(土)最終日(トラック&フィールド4日目)

いよいよ最終日だが日曜日ではなく土曜日なのが不思議なところ。漸くスタンドも賑やかになってきた。昨夜来の雨も早朝に上がり最終日にふさわしいコンディション。神大の若手OBも大勢詰めかけている。

女子10000m競歩決勝 福田が8位入賞

神大からは2年の福田が初出場。持ちタイムは5000m26分52秒、10000m換算すれば56分以上かかるだろう。ランク8位が53分台なので相当厳しい。出場は13人。最初は後方。しかし福田は徐々に追い上げ、なんと53分09秒56の学内新で8位に食い込んだ。都合で午前中は行けなかったのがトラックではこの種目だけ見落としてしまった。残念。この競歩力があれば9月の女子駅伝に向けて貴重な戦力になるかも知れない。楽しみな選手が出てきた。

男子やり投げ決勝 上野、太田 自己記録に届かず決勝に残らず

上野(4年、57m78、10位)、太田(3年、56m54、14位)の2人は入賞はどうか？というところ。しかし槍は水物、と言われるくらい当日の調子に記録が左右される。優勝候補が記録なしに終わったりするのはよく目にするところだ。しかし結果は上野が52m78、太田が50m66と自己記録を両名とも5m以上下回ってしまった。下剋上ならず。上野は体調に不安があったようだが、太田は？今回どうも調子が悪そう。昨年いいガタイをしていると評したが実は今年の飛躍を期待していたのだが・・・故障でもしたのだろうか？ちなみに8位は58m台。手を伸ばせば届くところにいる。太田はまだ3年、上野も残るそうなので来年は両名の

60mスローを期待しよう。

男子400mH決勝 藤原が5位入賞

藤原は予選記録6位で決勝進出。しかしレーンが一番内側の2レーン。影響はある。スムーズにスタートし右足で踏切り左足を振り上げ右足を抜く。急コーナーの場合このタイプの方が対応しやすいと言われている。加えて110mハードルのテクニックがある。インレーンのハンデもものかわりしっかりとついている。トップの二人は51秒台なので流石に速い。第4コーナーで7位から6位に上がる。残り50mで市大をかわし5位、最後50m懸命に追い込んだが大阪学院大に0秒05及ばず5位に終わった。しかしこのレース、予選では53秒台で走った選手のうち3名が54秒以上かかっている。厳しいレースだったはず。その中110mH出の藤原は53秒5近辺で2本続けて見せた。最後を飾るいい走りだった。

そもそもこの競技、400mランナーからの転向がいいのか、110mHから距離を伸ばす方がいいのか、が良く語られる。個人差はあるもののハードリングの要素が大きく110mH走者が距離を伸ばす方が成功している例が多いようだ。神大でも新24の今給黎さんは110mHがメインだとずっと言っていたが実は成績は400mHのほうがいい。一昨年の関西インカレ女子400mHで西田を破った藤原さん(武庫川女大)も110mHのチャンピオンだった。藤原もこのタイプだ。今110mHをしている選手諸君は400mは長いと思うだろうが取り組んでみれば意外と隠れた適性を発見できるかも知れない。しかしこの種目は3人が4年生。来年在が不安の種目のひとつである。

女子砲丸投決勝 麓 自己新で3位 表彰へ

期待の麓(4年、13m50、5位)が出場。彼女が4年前に入ってきたときのことを思い出す。これほどの体格の女子が入部してきたことはかつてなく、しかもインターハイ入賞も果たしている。果たして1年生時から投擲全般を引き受け学内新を連発。大車輪の活躍をしてきた。その彼女も最後のシーズンを迎える。感慨もひとしおだ。王子の練習を早めに覗きに行ったとき、一人で黙々とサークルで投げ込みをしていた姿を思い出す。コーチもいない中一人で精進してきた3年間だった。上位3人は14mを投げる。表彰台は厳しいかも知れないが心残りのない投擲をしてほしいと念じていた。願いが通じたのか麓は13m63の学内新で3位。見事表彰台に上がった。表彰台での満面の笑みに、これまでの日々、女子主将としての重責を果たしたこと、などすべてが詰め込まれているような気がした。本当におめでとう。

女子走幅跳決勝 武村 決勝に残れず

武村(2年、5m72、12位)。武村は三段跳で本意な結果となり雪辱を期しての登場だ。結果は5m57と自己記録を更新できず13位に終わった。1位は6m21だが8位は5m81。やはり自己新を出さないと入賞はでき

ないレベルだった。6mを跳べば3位。自己記録からア
ト28cm、今回は全体としてリズムが悪かったようだ。
フィールド選手はベスト8に残ってナンボと思う。6
本跳びあるいは投げられないと不完全燃焼だ。そうい
う意味で今回は残念だったろう。立て直してほしい。

男子走高跳決勝 佐野 決勝に進めず

佐野(M2、1m90)が出場。佐野はここ数年一人で走
高跳を支えてきた。特に大学院へ進んでからも黙々と
練習を積み競技力を落とさなかったのは素晴らしい。
事前ランキングでも2m以上が8人と厳しい環境だが
懸命に挑んだ。結果は1m90で10位タイ。入賞ライ
ンは1m95。ここの5cmが大きいのだろう。因みに自
己記録は1m96。16年間跳び続けてくれてありがとう。

女子800m決勝 明瀬 惜しくも4位

明瀬にとって最後のレースとなる。予選、準決と余裕
をもって通過したので期待が持てる。昨年までは米田
に頼っているところもあったが、今年は自分がやるん
だ、という気迫に満ちている。レースはスローペース
で大きな集団を形成。200mで明瀬がトップに立ったが
1周目69秒。遅い。集団が遅いので明瀬がチップに立
ったというところか？これでは自己新は望めない。明
瀬は3番手辺りのいいポジションをキープ。あと200m、
たたき合いが始まるが何とかついていく。こうなると
個々のスプリント能力が物を言うが明瀬もラストは
弱くない。150mで京教、武庫川が抜け出す。明瀬も3
位で前を懸命に追うが残り50mで立命にかわされ、0
秒77の差で4位(2分16秒56)。5位の同大とは0秒
11、6位の大阪学院とは0秒20の僅差。4位から6位
は大接戦だったが4位を確保したのは立派だった。
1位、2位のタイムは2分14秒台で共に2年生。昨年
1年生の強豪が多く関西へ入ったがその中の二人。ト
ップのベストは2分9秒台なのでこの結果も致し方な
いが3位に入らせてやりたかった。本人は悔いもある
だろうが予選から3本ともいいレースをしたのは見事
だった。応援に来ていた米田もそう思っただろう。
胸を張ってほしい。

男子800m決勝 植田 堂々の連覇

明瀬のレースの余韻冷めやらぬ中、昨年の覇者の登場
である。決勝は準決までの走りを見ていて、植田と大
阪市大の二人(矢守、上田)の争いと見た。ランクト
ップ神戸医療福祉大(1'51"33)は調子が上がってい
ない。川植もペース次第では自己新を狙える。レース
は川植がいきなり飛び出し先頭で400mを通過するも
通過タイムはそれほど速くはない。スローペースにな
るところを川植が救ったというところ。しかし流石に
無理をしたのだろう、残り200mで足が止まってしま
った。じっと追走していた植田、矢守、上田の3人が
一塊になって最後の直線に入る。植田は実は最後の
20mはあまり強くないのでハラハラして見ていたが、
この日は最後まで伸びた。市大の二人を押さえて2連
覇達成。見事だ。2位は上田、3位は矢守と市大が入
り気を吐いた。川植は7位からも大きく後れ1分59

秒81で最下位の8位に終わった。彼としても一発期
するところがあったのだろう。レース後も晴れ晴れと
した顔をしていたが展開次第では中位入賞と自己新
も狙えただけに惜しい気もする。しかし昨年まで後方
でレースをする癖があり、「まくりの川植」というよ
うなパターンをこの関西インカレでは大きく変え、予
選から前でレースを展開していた。植田は貫禄の2連
覇で春先の不調もどこへやら、むしろ昨年より切れ味
が出ていたように感じる。本人のモチベーション次第
だが本年中の1分50秒台は十分可能性があるを見た。
併せて来年も是非快走を見せてほしいものだ。

男子10000m 桂 平井、佐久間 入賞ならず

最後の個人種目の1万mには、ハーフ8位の桂(3年、
31'29"30、12位)、昨年駅伝で快走した佐久間(2年、
31'34"14、15位)、ハーフ6位の平井(2年、31'47"
08、20位)の3人が出場。ランキングでは入賞は少し
苦しい。レースは5000mと同じく龍谷、大経を軸にト
ップグループが形成されて進む。桂は故障の影響か後
方、平井が中段、佐久間はなんと8~10番目につけて
いる。医学部で今が一番忙しく練習もままならなかつ
たらしいが、この辺りはこのレースで自分はどんな走
りをすべきかを考えた食いつき。佐久間の魅力はこの
辺にあるのだろう。しかしながら練習不足でそれが通
用するほど甘くはない。つけたのは3000mまででそれ
以降急速に失速。ビリから2番目の26位にまで落ち
てしまった(33分31秒58)が彼の男気は称えたい。
秋の駅伝には調子に戻して昨年の快走を再現してほ
しいものだ。桂は5000mと同じく徐々に盛り返すも最
初の遅れが余りにも大きく、自己記録を1分下回る32
分27秒92で16位に終わった。平井は持ち味の淡々
走りで徐々に順位を上げ、前から落ちてくる選手を拾
う作戦だが、やはり上位との力の差は大きく、ハーフ
のダメージがまだ回復していなかったこともあり、32
分15秒09で13位に終わった。しかしランク20位だ
ったのでこの暑さでは実力は発揮したのではないか。
トップは龍谷大で31分10秒だが8位は31分55秒な
のでタイム的には十分届くところだが、初夏の気候と
勝負ということでは彼らもタイムを落としている。ト
ップの持ちタイムは30分30秒、8位の選手でも30分
40秒の持ちタイムなのでやはりサバイバルレースで
はあった。しかしこんな中、甲南の二人が6、7位に
入賞したのが目立った。ハーフでも4位、7位。甲南
大は3000mSCc、5000mでもきちんと入賞している。ま
だ長距離全体の層は神大のほうが厚いかも知れない
がトラックでは上をいかれており総合的な差も殆ど
ない。この秋の駅伝では甲南が当面のライバルとなる
だろう。

男子1600mリレー決勝 タイムを落とし8位に終わる

いよいよ大会の最後を飾る1600mリレーだ。400mのセ
パレートを走るリレーも美しいが、このオープンレー
ンでの体を寄せ合いながら競り合うマイルリレーは
まさに大会の華であり、幼い時の運動会のクラス対抗

リレーの興奮がよみがえる。極端に言えば、他はいつでもこのリレーに頑張れば何となくやったー！という気持ちになるものだ。さて神大は予選6位の記録で決勝進出。しかし各校まだ選手を温存したりして力をためている。神大はどれだけ頑張れるか？予選順位くらいはキープしてほしいが・・・走順は予選と同じく、八木(4年)、高柳(2年)、小山(4年)、植田(M1)の順。スタートしたが八木は予選ほど上がってこない。やはり決勝だ。各校も強い。ほぼ最下位で期待の高柳にバトンが渡る。高柳のすぐ前に他校の選手が並ぶが高柳も予選ほど伸びない。最下位のまま3走の小山へ。小山も差を縮められず植田へ。植田でも差が縮まらず、予選より4秒もタイムを落とし3分18秒47で8位に終わった。トップは大阪市大で3分12秒台の好記録。4位までが3分13秒台。予選のタイムでも5位がせいぜいということだったが、それはそれとしてもう少し競ってほしかった。3分18秒というタイムは昨年並み。各自レースを重ね疲れもあったろうがそれは各校も同じ。なかでも市大はアンカーの小林君(200mでの1年生チャンピオン(21秒55))が最後逆転するなど大活躍。トラックでの市大の総合3位の原動力となった。市大チームは1年生2人と2年生2人。まだまだ伸びる。市大の関係者が歴代でも一番強いのでは、と言われていたような気がする。

予選と比較した神大の各自のラップを示しておこう。八木(49秒86→50秒19)、高柳(48秒09→49秒90)、小山(49秒27→49秒96)、植田(46秒74→49秒39)で、植田が3秒落としているのが大きい。これは最後、勝負が決まってから諦めたところもあるので全面的には参考にならない。八木と小山は言うほどの差はないので、ポイントは2走だったことがわかる。高柳はバトンミスがあったりして乗っていけなかったところもあると同時に、初めての関西インカレで200m2本、400mリレー2本に加え、1600mリレー予選の合計5本を走っており疲れもピークだったはず。しかし400mリレーと1600mリレー予選で見せた高柳の鮮烈な走りが色あせることはない。神大はM1が一人、4年生が2人。4年生の2人は今年が最後のはずなので、200m、400mを走れる選手の養成が急務であると思う。しかし、昨年は予選で敗退して残念な思いをしたが、今回は声を張り上げて応援できた。この日大勢集まった若手のOB諸君もそう感じていたのではないかな？やはりマイルリレーはスリリング。競技場は最高だ！

(所感)

かくして2017年度の関西インカレは終了した。2部総合では5位だが得点は昨年に届かず60点に終わった。ちなみに1位の龍谷大は145点、2位のびわスポ大は135点。やはり1部校は強すぎた。3位は摂南大の81点なので1、2位とは差がありすぎる。私学はスポーツ推薦など力を入れており差は広がる傾向にある。最後のMTGでは主将の瀧瀬君も反省と悔しい気持ちを絞り出していたが、椎木会長の講評でも同様にそれがにじみ出していた。今回はとにかく故障者が多すぎた。1部昇格は結果だが、それに向かって戦力が揃わなかったということは戦う前から負けていたということ。

個々には見るべきところがたくさんあり。懸案の短距離の復活が現実味を帯びるなど大いに評価できる点も多い。しかし種目によっては今後見通しが立ちにくい種目も多い。例えば十種競技、投擲全般、棒高跳、400mHなどである。したがって当面1部昇格は絵に描いた餅に終わる可能性が高い。瀧瀬主将も言っていたように「旗を降ろしてはいけない」が、もし一部昇格を目指すならスカウティングを大幅に強化しないと難しいだろう。今回の龍谷大、びわスポ大を見ると選手層の質・量が全く違う。そういう中、身近な大阪市大、甲南大は部分部分でキラリと光る姿を随所に見せた。特に大阪市大の2部トラック3位は特筆に値する。小さくてもキラリと光る集団を目指すのも悪くない。我々OBも頭を切り替える必要があるかもしれない。瀧瀬君はじめ4年生の幹部諸君と選手諸君お疲れ様。次は次期主将の近藤君を中心とした新しい軍団の成長を期待する。

因みに1部優勝は235点の関学で、2位の立命館大(128点)に100点以上差をつける圧勝だった。まさに1強。降格は大阪大と京都教育大。来年はこの2校と相まみえることとなる。

女子も西田がいるところが全盛で、米田が抜け、今回も麓、宮崎、森下、明瀬が抜ける。日高、武村がかろうじて得点してくれるだろうが、リレーメンバーにも事欠くようでは軍団の体をなさない。残ったメンバーは、けがで離脱している次期女子主将の末廣を中心に、その伝統はしっかり次の世代に伝えていってもらいたい。この1年、麓を中心に4年の女子は良く後輩を引っ張りまた後輩たちもそれに応えた。麓の表彰台はそれを象徴している。

最後になるが、選手諸君は下を向く必要はない。所与の条件の下、皆よく戦った。我々は諸君のことを大いに誇りにしている。一緒になって又新しい神戸大学陸上競技部を作っていきましょう。

以上